

---

# けいおん！～転生したら何故かJK～

Thalys-hiiragi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん～転生したら何故かJK～

### 【Zコード】

N3812Z

### 【作者名】

Thalys-hiragi

### 【あらすじ】

天界の手違いで死んでしまった松本 雪乃がけいおん！の世界に転生！？

相棒のムスタングベースと共にゆるやか部活ライフを送るお話です。

更新は毎週曜日不定1回です

転生物が苦手な方はご遠慮ください。

## オリジナル主人公設定

オリジナル主人公のデータです  
転生後のデータ

氏名：松本 雪乃

桜が丘高校在籍：1年2組

担当：ベース／ギターも可

誕生日：1992年4月12日（牡羊座）

身長：162cm

体重：54？

血液型：O型

家族：姉（異母姉妹。両親はすでに他界）

趣味：アルトサックスの演奏

ショートカットの黒髪にフレームレスの眼鏡が特徴。普段はあまり自分から行動を起こそうとはしない物静かなタイプ。ただし時々律ですら驚くような突拍子もない行動に出ることがある。

使用楽器関連

ベース：フェンダーU・S・A・ムスタングベース（ファイエスタ・

レッドノオフホワイト)

弦：エリクサー 14077

NANOWEB 4 string

MEDIUM

アンプ：ベースアンプ：FENDER Rumble

60

イコライザー：BOSS GEB-7

TU-12EX

ベースチューナー：BOSS

TU-12EX

アルトサックス：ヤマハ製

## プロローグ

俺は、唐突に目を覚ました。

「ここは・・・」

真っ白な空間

「さて、早速ですが！あなたは死にました！」

なんだそりや・・・

「あんた誰？」

いきなり現れたのはなんというか・・・

「女子高生？」

うん、どう見ても某四コマ漫画の登場人物だわ

「人の話聞いてる？？」

「うん、俺死んだんでしょ？・・・って死んだあー？」

死んだってどういうことだ？

「あー冷静に聞いて欲しいんだけど、いや・・・大変申し分けにくらいんだけど全部こっちの手違いなのですよ・・・」

さて状況を整理してみよう。

- ・現在目の前にいるのは自称「神様」である
- ・俺は死んでいる
- ・俺は転生の権利を持つている
- ・そしてこの能無し（神様）の責任である

「俺、こういう小説読んだことがあるんだけど、転生して魔法を使って世界を救うとか・・・俺としてはごめんけど・・・」

「正確には私の責任じゃないんですけど・・・私は基本的に後処理係りだし・・・」

神様（自称）は落ち込んでしまった

「で？ どうしようと？」

「えーっと、とりあえず上司からは希望の世界に転生をと・・・」  
なんかこの神様（自称）は権限は弱いというか最初の勢いはどこに行つたのか・・・。

「じゃあ、変な争いのない平和な世界でお願いします」  
俺がそういう言つとその神様（自称）はいきなり元気になり  
「はい、かしこまりました。では行ってらっしゃいませ」  
神様（自称）の笑顔に見送られて俺は次の世界に転生する羽田になつた。

薄れゆく意識の中で

「ところで、どんな世界に行くのか聞いてない・・・」  
そんな事を思った。

## 第1話「状況確認」

「…………あて、…………ちゃん、…………お……て…………」  
俺は快い微睡みから覚醒した

「おはよー、雪乃ちゃん、急がなことと遅刻してしまひわよ  
この声は誰だ？でも知つてゐる

「お姉ちゃん・・・待つて・・・あと5分だけ・・・」

一瞬、自分で言つてこることに驚愕した

寝起きは良いと自負していたのだが、それ以上にこの声を姉と認識  
してこることに惊いた。

「もう、早く起きないと準備してゐる間に梓ちゃんが来ちゃうわよ？」  
そう言つて姉は俺の布団をはがす

田に入つてきたのは白と黒を基調とした部屋で、オーディオラック  
にはジャズやロックを中心としたCDやレコード、またそれ専用の  
プレイヤーなどが並んでいた。

自分の記憶してこる部屋ではないにもかかわらずこれを部屋として  
認識している。

「せうせう、早く顔洗つて着替えてから、下で待つてゐるわよ  
まつまつ、じつこいつだ？記憶は・・・えーと、部屋の配  
置は分かる。

・エラ・エラ・エラ・エラ・

これは田覚まし時計じゃなくてじやなくて・・・って携帯？  
机の上にあつたスマートフォンを手に取りロックを解除。

タイトル：転生完了のお知らせ

添付ファイル：ナシ

本文：転生が完了しましたことをお知らせいたします。なおご不便な点がございましたらこのメールアドレスまたは下記の直通ホットラインでご一報ください。

直通ホットライン：9930-52-999899

担

当：アテナ一等庶務官

「担当が庶務なんだ・・・」

とつあえず「転生した」という記憶は見つかっては・・・学校に行かなくちゃ・・・。

記憶を頼りにクローゼットを開けて高校の制服に着替える。

私、高校生になつたのか・・・

「一人称おかしい・・・なんか普通に「私」って出てきた・・・」

そう言えば精神は肉体に影響されるとか何とかという論文があったらしいと書つのをどこかで聞いたことがある。

・・・・・

「またメール？」

Fm：中野 梓

タイトル：起きた？

添付ファイル：ナシ

本文：もう流石に起きてるよね？今日から高校生なのに遅刻は無しだからね。

じゃあいつもの時間にインターフォン鳴らすからね

いつもの時間、記憶が正しければあと20分弱。

「早く着替えよ・・・」

真新しい制服に袖を通してリボンを結びバックを持って下に降りる。そう言えばもうサラダ油が無かつたんだっけ。

「お姉ちゃん、サラダ油がそろそろ無いと思つたんだけど・・・」

台所に入るとそこにあつたのは

ヤマハ2サイクルエンジン用エンジンオイルの4リットル缶・・・。

「お姉ちゃん!?」

だめだ、お姉ちゃんは料理は美味しいのに時々大変なミスをするんだつた。

「あ、油がなかつたからもつて来ておいたわよ?・・・って雪乃?もしかして私、またやつちやつた!?」

また・・・過去にも・・・2回くらいあつたのか。

記憶を探れば出てくるけど結構探す間にタイムラグがあつてまだ不便だな。

朝食を食べてちゃんと食用油を台所に入れたらこりで

・ピンポン

チャイムが鳴つた

「雪乃ちゃん!、梓ちゃんが来たみたいよー」

もうこひんな時間か・・・出かけなきや。

## 第1話「状況確認」（後書き）

「意見・「感想」「感想をお待ちしています

## 第2話「新入生」

「ガチャ

ドアを開けると春なのにまだ少し冷たい空気が私の肌をなでた

「おはよう、雪乃」

ドアの外にいたのは私の幼なじみで今年から同じ高校に通う中野梓ちゃん。

とりあえず記憶を頼りにだいたい分かるな。

「おはよう、梓。今日から同じ学校だね」

彼女とは小学校が同じで中学校は私が私立にお受験してしまったため、中学は違う学校だった。

「おーい、俺たちを忘れてもらつても困るんだが?」

あ、『いっしょは片瀬祐』、同じく幼なじみ。あだ名はユウ。今年から共学の高校に進学したらしい。

ちなみにうちの隣にアルアパートに住んでる。実家は大企業の社長とか何とか。

「そうだが、いくら学校がかわるととはいえ水臭いではないか」

こっちの背が高くて古風なのは富本?。彼の実家は柔道の道場なんだけど柔道だけに飽きたらず剣道や最近ではカボエラも始めたとか。『いっしょは祐』と同じ高校に進学したらしい。

「はいはい、『めんね』

とつあえず軽くあしらつておけば大丈夫なはずだ。

私と梓は両親が共にジャズバンドをやっていてそこで知り合ったのが最初だった。

もつともそれは私や梓が生まれる前の話でお姉ちゃんが小学校に入学する年だつたらしいので私の生まれる1年前になるのかな。

「高校生か・・・」

高校生を2回も経験するなんて思つても見なかつたので正直・・・心の準備が・・・。

しかも女子校らしいじやないです。

「どうした? そんなに待ち遠しかつたのか?」

空を見ながらつぶやいた私に? が話しかけてきた

「待ち遠しかつたわけじやないよ。ただちよつと想つ」こともあつてね

うん、たぶん君には一生分からないと思つ。私だつて初めての経験だつたから。

「またまたあ、そんな年でもないだろうに」

うん、実年齢はそうだけどそれ以前の次元ですつ飛んでるからね

「これから入学式なんだし浮かない顔してても仕方ないよ」

梓に言われて若干ナーバス気味になつて『いる自分をリセット』した。

「そうだよね

祐一達と分かれて梓と一人で私立桜が丘高等学校の入学式に向かつた。

入学式自体はつつがなく終了したけどまだHRあるんだよね。  
私の座席は梓の後ろ。

まあ適当に良い位置だけど

「じゃあ梓は軽音楽部に入るんだ

ジャズ研はちょっとイメージと違つたから軽音楽部にしたのか・・・。

「うん!...ところで雪乃は一緒に入ってくれるよね?」

入学式で知り合った友人と話してゐるんだけど・・・つてなに！？連行決定？

「え・・・まだ思案中」

だつてさ、いきなり部活とか言われてもね・・・今日初めて知つたよ。

「そうだよね。松本さんだつてほかの部も興味あるよね  
うん、知り合つた早々に助けられました。  
ありがとひ愛川さん

まあしかし、部活をやらないのも何なのでどうした物かと考えていると

梓が突然席を立つた

「梓？」

そのままスタスタと歩いて行くと

「あの、軽音部のこと何か知つてるんですか？」  
ボニー・テールの子とショートカットのツインテールの子に話しかけた・・・ああ軽音部の事でも話してたのか。

「ああ、この子のお姉さんが軽音部なの」

あ、梓が暴走する。うん、16年の経験と知識から言えることだね。  
「本当！？お姉さんて、パート何やつてるの？」

ああ、梓が完全に暴走した・・・

「ギ・・・ギターだけど・・・」

ギターなんだ。たしか学園祭のライブだとレスポールのスタンダードだと思う。改造機じやなれば・・・。

梓のテンションが最高潮に達している。おひいて行かれた私と愛川さんは・・・。

「梓ちゃん、周り見えてないね・・・」

愛川さんが苦笑しながら感想を述べた

「昔からテンション上るとあんな感じだつたよ。もう慣れたけど」

「まもなく、新入生歓迎会が始まります。新入生の皆さんは行動に移動してください」

校内放送が入り新入生が行動に誘導されていく。

「梓、もう友達ができたの？」

さつきの一人と仲良く話していた梓を講堂に連れて行くため

「うん、平沢 憂さんと鈴木 純さん」

ポニー・テールが平沢さん、ツインテールが鈴木さんね

「松本 雪乃です」

挨拶もそこそこにソソクサと講堂に移動することになった

続く

## 第2話「新入生」（後書き）

作者「遅れたあ・・・」

雪乃「貴方が遅れるのはいつものことですけどね」

作者「ああ・・・主人公にいじめられる作者・・・だと・・・この作者不幸者！」

雪乃「はいはい、じゃあとりあえずそつこつことはちゃんと仕事してから言ってくださいね」

作者「じゃあもう書いてやらないうぞ」

雪乃「そつやつて信頼を地に落とすのは作者さんですので『勝手に』

作者「・・・」

作者「さて、いつも通りのスロースタートだったわけですが、なんと作者は原作しか読んでません（爆）」

雪乃「貴方映画見たでしょ？それからアニメ1期も・・・2期は残念だつたけどさ」

作者「ああ、そういうえば地上波やつてたのをテレビが勝手に録画しててくれたおかげで見れたねえ」

雪乃「ちょっとこのヘッドフォンつけて」

作者「なになに？なんか弾いてくれんの？」

カチヤ・・・・ギューン！（雪乃が最大音量でベースを弾いた音）

・・・チーン（作者が昇天した音）

雪乃（これで話が先に進める）

雪乃「さて、この作品は週1回の不定期更新となつているのですが

ある程度経つたらちやんとした更新日を決めたいと思います。それではどうか皆さん、私のこの物語を応援していただけるとうれしいです」

「意見・感想をお待ちしています。

### 第3話「新歓ライブ！」

【次は軽音部によるクラブ紹介と演奏です】

ステージの照明が付くとキターーの人のMCが始まった  
「どうも、軽音部です。新入生の皆さん、ご入学おめでとうござい  
ます。私、最初軽音部って聞いて軽い簡単な音楽だと思ってたん  
ですよー」

へ、  
へ、  
・  
・  
・  
か、  
軽い音楽ね  
・  
・  
・

その後も少々長めのMCが続き・・・ドラムの人に対するイックで殴られ二一〇。

「それじゃあスタート！！」

演奏が始まると私は驚いた。

だうでどいでも上手だうだから……だと思ひな。

ノマフソガ バ、バクのヘザヅアババ  
ク

かな、うん、改造機でなければそうだと思う。

すこいね、梓・・・」

卷之三

•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•

•  
•  
•

2

•

「軽音楽部でした。次は吹奏楽部の・・・」

- 放課後

「軽音楽部は、音楽準備室ね」

平沢さん達は入らないって言つし・・・二人だけか。  
多少ギシギシ言つ階段を最上階の音楽準備室まで、ゆっくりと階段  
を上がつていく。

「学校見学をしたときにも思つたけど、やっぱり良い感じの写真が  
撮れそうだね」

学校 자체は相当古い建物だと思つ。

「もー、音楽以外だとやっぱり写真にしか興味ないんだから・・・」  
確かに音楽以外の趣味は写真だけじゃ・・・

「そんなこと言つてると、写真部に行こうかな・・・」

最上階に続く階段を上りながら

「ああ、もう。ごめん、ごめん」

そして、音楽準備室へ

「軽音部つてここですか?」

梓が先頭で音楽準備室に入つていく。

「入部希望なんんですけど・・・」

私が続けて入つていつたら

「確保おおおおおおつ!」

「ギヤー!」

何故か殺氣だつた部長さんらしき人に確保されました・・・

・数分後

「えつと、1年2組の中野 梓といいます。パートはギターを少し・  
・・」

自己紹介になつたので梓が自己紹介を始めたのだけれど・・・

「おっ、唯と一緒にだな!」

この人は部長の田井中 律先輩。新歓ライブでMCをしていたギターチーフの平沢 唯先輩にドラムスティックをぶつけた人ですね。

「よろしくお願ひします。唯先輩！」

梓がそう言つと・・・その唯先輩は・・・浮かれてる・・・  
「おーい、戻つてこい」

律先輩が唯先輩を戻すため声をかけたけど・・・

「じゃあ、今度は・・・」

当分無理そのので次に私が自己紹介をすることになった

「はい、1年2組の松本 雪乃です。パートはベースを・・・」

私のベースをという単語に反応したのは

「じゃあ澪と一緒だな」

そう言つて律先輩はベースの秋山 澪先輩を呼んでくれた。

「よろしくお願ひします。澪先輩」

その頃、梓はといふと・・・唯先輩のギターを使って何か弾くらじい

梓の演奏を聞くのはほぼ半年ぶりなのかな・・・

ジャララアアアアン

昔よりぜんぜん上達してる・・・。

「う、うまい」

私は・・・どうしよう、今はレパートリーがジャズしかない件について・・・

「じゃ、じゃあ次は雪乃ちゃんね」

そう言つて澪先輩のベースを渡される・・・え?もつー?ああ、そ  
うかもうか・・・

「じゃあ・・・とりあえず分かる曲で・・・」

うん、100パーセントとは言えないけど耳コピでふわふわ時間の  
ベースを弾いてみることにした。

・・・・・

- 演奏終了

ぽかーんとしている畠さん・・・

「あ、もしかして変な演奏で畠さんの「気分を害してしまいました

か!?」

「ううじょひ、失敗したかも・・・

「す・・・すごい・・・」

最初に口を開いたのは梓だった

「・・・え?」

訳が分からぬ・・・ほら昔からできたけど・・・やつてなかつただけだし。

雪乃Side End

澪Side In

まさか、ふわふわ時間のベースパートをほぼ全部口ペーできるなんて  
「す、すいません、聞くに堪えませんでしたか?」

雪乃ちゃん・・・すごい子が入部したんだ。

ところで・・・唯、ちょっとは練習してもらわないと新入生にポジ  
ションを持つて行かれかねないぞ・・・

### 第3話「新歓ライブ！」（後書き）

雪乃「いや、ロングスケールって大変でした・・・」

作者「ムスタングベースばかり弾いてるからじゃね？」

雪乃「転生前はロングスケール弾いてましたよ・・・転生してからからだが小さくなった気がする」

作者「うんー0センチ以上身長は下がってるしね」

雪乃「公式資料見なきや解説できない作者・・・」

作者「まあ、4作品同時連載してると分からなくなるよ」

雪乃「もういいよ、モンハンでもやつてなさいよ・・・」

作者「うわ、なんかひどいよ・・・」

歌織「まあ、仕方ないのではないでしょうか？」

雪乃「歌織さん！」

作者「さて、今回のゲストは、乙女はお姉様に恋してる～群青の君～主人公、鷺宮 歌織さんです」

雪乃「次回の更新のバトンタッチのために来ていただきました」

歌織「では、引き継がせていただきますね、無能作者さんはあっちに行つてください・・・」

作者「ほらひどい・・・そんなこと言つてるから最近リア友に無能作者つて言われるんですよ・・・」

歌織「だつて無計画に4作品同紙連載ですよ？バカです」

雪乃「そうかもしれないですね、これで連載滞れば本当のバカです」

作者「ああ、もう良いよ、次回から俺、ディレクター側に回るから歌織「さて、次回は作者がディレクター側に回るといつので面白くなりそうです」

雪乃「次回も楽しんでいただけたら幸いです」

「J意見・「J感想をお待ちしています。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3812z/>

---

けいおん！～転生したら何故かJK～

2011年12月27日21時46分発行